



大学生の品格

『大学生の品格 —プリンストン流の教養24の指針』

(二五六頁、二二〇〇円(税込)、日本評論社)

おかべみつあき
岡部光明

(慶應義塾大学名誉教授)

教育とは、学校で学んだことを全部忘れた時にその人に残っているものを指す。これはアインシュタインの言葉です。では、それは一体どんなことでしょうか。私は大学教員として長年、金融論や日本経済論の研究や講義をする一方、この問題をずっと考えてきました。本書はその解答を私なりにまとめたものです。大学教育が目指すべきことを本書では二つの視点をもとに主張しています。第一に、大学生は「三つの顔」を持つ存在である、という視点です。すなわち、若き研究者としての学生、良き市民としての学生、人間としての学生、の三つです。大学生は専門的知識を学び、身につけ、そして卒業論文を書いたりするので、彼らは若き研究者に他なりません。また学

生は一人の社会人でもあるので、より良い市民になることも大学では追求すべきです。さらに、揺るぎない価値観や生き方を体得し、人間的にも成長することが大学時代には求められるはずで

一番目の顔は誰も見逃すことがありませんが、二番目、三番目の顔は、従来あまり強く意識されなかったのではないでしょう。本書はとりわけ後者二つを重視している点に特徴があります。

本書のもう一つの視点は「プリンストン大学の教育方針から示唆を得る」ことです。プリンストンは全米トップに評価される大学である(USニューズ誌の二〇一四年版ランキング)だけでなく、とりわけ学部レベルの教育のユニークさと卓越性が広く知られています。

二十年以上も前になりますが、私はプリンストンで一年間教壇に立つ機会があり、その教育の理念と制度に強い衝撃を受け、また感動しました。その後、再び同大学に滞在してその教育を詳細に調査する機会も得ました。このため、本書にはプリンストン流の大学教育の考え方を積極的に取り入れています。

大学教育の目標として本書では、日本語力、インテグリティ(誠実さ)、向上心を強調しています。こうした視点に立ち、良い論文の書き方、効果的な発表の仕方などだけでなく、揺るぎない生活態度とは何か、それをどう習得するかなどについても、多くの項目にわたって具体的、実践的に述べました(時間、勉強、リスク、失敗、規律、怒り、感謝など)。

知識は必然的に陳腐化し、忘れ去られますから、大学では永続的・普遍的な知的スキルや人間性を体得することが本当に重要だと考えます。本書で述べた多くのことは、私が慶應SFC(湘南藤沢キャンパス)在勤時に学生に説いてきたものですが、本書はむしろ社会人に向けたメッセージだという感想を多くいただいているのは、とてもありがたいことです。